

## 2014 平和行動 in 沖縄「北海道代表団」を派遣

戦没者の霊を慰める「慰霊の日」と定められた6月23日に合わせ2014平和行動 in 沖縄が行われた。連合北海道は21日から25日の5日間、戦争による惨禍が再び起こることのないよう、恒久平和を希求する行動及び学習を目的に16名の北海道代表団を派遣した。

22日、北海道独自行動として、学習会を開催した。第一学習会では、沖縄国際大学前泊博盛教授より「集団的自衛権と今後の沖縄」と題し講演を頂いた。その中で教授は「日本の行政権は米国によってひざまづかされているという実態が日米地位協定を見ているとたくさん出てくる。その流れの中に集団的自衛権もあって、アメリカが攻撃されているのに安保条約を結んで



いる日本が守らないのはおかしい、暴漢が襲ってきたら自分を守るべき話に持っていかれてしまう。そこから議論が進められてしまうところが、この国の悲しい民主主義、民度の問題である。民度を上げ、主権者としての権利を行使しないと、とんでもないことになる。」と提言した。また「集団的自衛権の行使の前に、論じるべきことは、日本の外交力の低下である。外交ですべきことを、軍事に頼ろうとしている。外交力を高めるには情報収集をし、自分で判断して動かなければならないのに、アメリカに言われたことをうのみにしている。この時期の集団的自衛権の論議は、外交力で劣勢にある日本が、武力行使に活路を見いだそうとしているかのようにも見える。」と日本の外交のあり方について批判した。



第二学習会として、遺骨収集ボランティア「ガンマフヤー」の代表である具志堅隆松さんより講演をいただいた。「ガンマフヤー」とは「ガン（沖縄の方言で洞窟やくぼみ）を掘る人」という意味で、沖縄戦で亡くなった方々の遺骨を、ガンの中や防空壕などで探し掘り出して、遺骨を家族に戻そうという活動家のことだ。具志堅さんは、毎年百体以上の遺骨が出てくる現状にあるにも関わらず、国が前向きでないことについて触れ「DNA鑑定をすれば返すことができのに、名前のある遺品が出てこない限りできないという、国の高いハードルがある。国民の側から国家の戦争責任を指摘して責任を果たさせるようにしなければならない。」と国の姿勢について批判した。また、なかなか進まない収集作業の中で、緊急雇用創出事業として失業者やホームレスの方達をハローワークを通じて募集し収集作業を行うという、戦後処理と雇用対策を一体として進めた事例も紹介された。具志堅さんはその事業を始めるにあたり「60年以上前の助けてくれと声も出せない弱者に、現代の弱者が手をさしのべることによって双方が救われるのであれば、戦没者も許してくれるのではないか。」と当時の思いを語った。

翌23日、連合本部主催の2014 平和オキナワ集会へ参加した。主催者挨拶に立った連合本部神津里季生事務局長は、「基地問題は沖縄に限らず、基地をかかえる多くの地域における共通の課題である。我が国の国防安全保障が基地をかかえる地域の負担によってなっていることを考えるとき、日本全体の問題であり、国家主権そのものの問題だ。」とし「時には、なぜ労働組合が基地問題に取り組むかという声を聞くこともあるが、それは私たちが安心して暮らし、働き、労働運動に携わるには、平和であることが大前提だからである」と述べた。



平和メッセージとして、連合北海道を代表し安田宗一副会長が挨拶に立ち、北海道の問題として矢臼別における実弾移転訓練で演習地外に着弾した重大事故やF16戦闘機千歳基地訓練について触れ「これからも緑ゆたかな北の大地の破壊を許さず、長きにわたり犠牲にされてきた沖縄の基地問題を解決するため、連合北海道としても全国の仲間と連帯して世論を高めていく。」とし、「この平和行動を根室につなぎ、運動に全力を傾ける。」ことを表明した。

最終日の24日は、フィールドワークとして南部戦跡を回り、ひめゆり平和祈念資料館や沖縄県平和祈念資料館では、体験者の残した言葉や壮絶な映像等を通して、反戦への気持ちを新たにした。また、全国の仲間が沖縄県庁前広場に結集、国際通りをデモ行進し道行く人々に訴えた。



参加者は今回の行動で得たものを、今後の産別・地域での運動に生かし、連合北海道としても、戦争がもたらした惨劇と実相を忘れることなく、更に「米軍基地の整理・縮小」「日米地位協定の抜本改定」を求め平和運動を推進していく。